

# さくら・志津 憲法9条をまもりたい会

— 戦争をしない・させない・命がだいじ —



## 日本国憲法第9条

(戦争の放棄、軍備及び交戦権の否認)

① 日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は国際紛争を解決する手段としては永久にこれを放棄する。

② 前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。

## コロナ禍に思う～医療の現場から

### 【生活基盤の崩壊】

私は月～木は近在の病院で、週末は青森・十和田の病院で仕事をしています。十和田の患者さんの話を少ししましょう。

60代後半の糖尿病の患者さん。彼は、今では数少なくなった、いわゆる“ドサ回り一座”の座長です。演目は国定忠治などの時代劇や人情物で、毎年春・秋には彼の一座のポスターが町のあちこちに張り出されていました。先日受診の際、先月に比べ体重が2キロ落ちており、顔にも疲れがありあり。聞くと、コロナの影響で、演劇、夏祭りがすべて中止になり、収入が断たれ、食事も満足にとっていないとのこと。座長として一座のみんなに申し訳ないと、涙流さんばかりの落ち込みでした。国や県から支援は受けられないのか聞いたところ、問い合わせてみたが、“できません”と冷たい返事が返ってきたと。行政はどうすればお金を出さずに済むかしか考えていないよと、力なく話されました。体重が落ち、糖尿病のコントロールはかつてない良い数値でしたが、悲しい現実の結果でした。

和牛を育てている70代後半の患者さん。彼は、毎月受診して私の診察を受け、私と話をして帰ることが彼の生き甲斐にもなっていました。この彼が、先日定期受診日に受診されませんでした。看護師の話では、今年は和牛の需要が激減して牛が売れず、牛農家は困り果てているとのこと。一頭一頭に愛情を注ぎ、手塩にかけて育てた牛が売れない、収入の道が断たれる。働く希望が砕かれる辛さは、高齢の患者さんから受診する気力をも奪ったのでしょうか。

菅官房長官は8月2日のテレビインタビューで『Go To トラベル』について「地域経済を支えている観光関連産業は、瀕死の状態だと言っても、言い過ぎでないほど極めて厳しい状態にある。しっかり予防策をとってやって頂きたい。」と述べ、瀕死の観光

関連産業を救うために必要な対応と是認しました。コロナで苦しんでいるのは、観光業界だけではありません。今全国いたるところで、様々な職種の人が収入の道を断たれ、明日の生活にも困る状況に追い込まれています。国はこうした人たちに思いを寄せ、隅々まで行き届いた生活援助・事業支援を速やかに行って欲しいと切に願います。

コロナは、自主的予防策をとれば、拡散を防げるほど甘くありません。Go To トラベル開始後のコロナ感染者の急増、全国への広がり、政府の愚策がコロナの感染拡大に道を開いたことを示しています。まさにコロナ禍は人災です。

## 【地域医療の危機】

コロナに対する国の医療政策は、無策と言わざるをえません。当初、国はコロナ診断のための検査、医療的対応を保健所に1本化し、全国の医療機関を埒外に置くという、パンデミックが予想される感染症対策として、およそありえない方針を出しました。PCR検査キットの大量生産、全国の主な医療機関で速やかにPCR検査ができる体制をとるべきでした。

病院に行っても診てもらえない、検査してもらえない、発熱で受診すると病原菌扱いされるといふ、コロナに対して医療機関不在の状況になりました。コロナ感染症に対して、各医療機関がどのようにかわり、その役割を果たすのか、国の政策・指導はありませんでした。医療機関の対応は、自己防衛、職員のコロナ感染予防。その結果生じたのは極端な受診控えです。十和田の病院の内科外来受診者は今までの2/3から1/2と大きく落ち込んでいます。小児科の落ち込みは更にひどく、危機的状況です。十和田の病院の事務長は私に「コロナより怖いのは経営危機です」と言いました。都会の大病院のみならず、全国の開業医、中小医療機関が経営危機、存続の危機に陥っており、状況は深刻です。コロナ禍があと半年続けば地域医療はまちがいなく崩壊するでしょう。

## 【そしてこれから】

武漢で封鎖の日々を日記（『武漢日記』）に綴った作家、方方（ファンファン）氏は「一つの国が文明国であるかどうかの基準は、ただ一つしかない、それは弱者にたいする態度である」と述べているそうです。

コロナ後の社会がどうなるのか、セーフティネットを充実させ、弱者や環境にやさしい社会に向けて足を踏み出して行く国になるのか、相も変わらず新自由主義を信奉し、貧富の差は一層拡大、大企業保護・軍拡路線を踏襲、医療・保健は市場原理にまかせ、経済も医療も精神も貧しい国になっていくのか、コロナ禍中の今、これからの国の在り方が問われています。

本屋に行けば、コロナ禍に関する、またコロナ後の世界がどうあるべきかに関する本が目につきますが、岩波新書『コロナ後の世界を生きる』村上陽一郎編集が私のいち押しです。

(2020年8月 Y. M.)

## 『コロナの時代の僕ら』(パオロ・ジョルダーノ、飯田亮介訳(早川書房) 2020/4月刊) を読んで

この本の書評を新聞で目にしたのはいつの頃だったか?

新型コロナウイルス 感染症について、よくわからず不安ばかりが先行していたときだったから、若いイタリア人である著者の冷静な眼差しが目を引いた。

そして、この本ではじめて感染症の正式名称が COVID-19 であるという事と、ウィルスの正式名称も知った。

2月から書き始まり、月日を追って、自らの生活の様子も含めてエッセイ風に書かれているので、読みやすく、著者が物理学者で、数学好きのせいか、出てくる数字も感情的でなく客観的だ。

著者は、あとがきの『コロナウイルス が過ぎたあとも僕が忘れたくないこと』の中で、今日のパンデミックの原因を～自然と環境に対する人間の危うい接し方、森林破壊、僕らの軽率な消費行動にこそあることを～と述べている。6月末にも、読売新聞紙上に、いとうせいこう氏による書評が出ていたが、彼もこの一文を取り上げていた。そして、今も著者の暖かくも、厳しい指摘は本質をついていると書いていた。(K・Y)



### コロナに追われたウユニ塩湖行き

3月9日～20日の行程でボリビア・ウユニ塩湖への12日間の旅に出かけました。ツアーを募集したT社から連絡がある度に、今はコロナウイルス感染が広まってきているから旅行を中止しないのかと再三尋ねましたが、その時は欧州、中国等特定地域にしか新型コロナは広まっておらず南米には感染がなかったため、このツアーは催行されることとなりました。旅程はメキシコ・パナマ・ウルグアイ・アルゼンチン・パラグアイを経由して、ウユニ塩湖に入るというものでした。3日目WHOのパンデミック宣言(114か国・11万8千人の感染者)から、アルゼンチンの大統領が『中国人、韓国人、日本人、イタリア人等の感染地域からの入国禁止を発表、いつから実行するかは不明』という報に接し、緊張を伴う旅を続け、感染地域からの旅行者のため、厳重な健康診断、旅程の変更を強いられました。

4日目のラ・プラタ川での出入国審査は、未だ大統領令は実施されておらず無事通過し、ブエノス・アイレス市内観光していても、頭の片隅には出入国のことが気になりだしていました。事件は、早くもアルゼンチン国境の町ポサーダスで起きました。旅程表では、ポサーダスで国境列車に乗り換えパラナ川を渡り、パラグアイへ入国予定の所、コロナウイルス感染地から来た旅行者ということで、列車に乗るのを拒否され、路線バスで国境を越える羽目に陥りました。現地ガイドが一生懸命入管にかけ合ってくれましたが、それしか方法がないということでした。よって、16人(ツアー客15人)の一行はスーツケースを持って路線バスに乗り国境越えし、パラグアイに入国したら、一人ずつ防護服の医療関係者の問診と体温測定(サーモグラフィ)を受け、皆異常なしということで無事入国出来ました。

ようやく辿り着いたウユニ塩湖は快晴で他に旅行者も見あたらず、ピクニックランチを含め活動を満喫しました。遠くに4WDの車両1台が見えるだけでした。塩のホ

テルに2泊する予定の所、外出禁止令が出てウユニ空港が閉鎖されるとのことで、1泊に切り上げ、2日目夕暮れの塩湖を覗いてから、ウユニ空港に向いました。小さなウユニ空港は、どこかに散らばっていた日本人と外国人観光客で一杯でした。

ラパスに入って一安心と思いましたが、翌朝ホテルのロビーに集合した所、添乗員から、「ペルーのリマ空港が閉鎖されました。よって、リマ→メキシコシティという行程が不可能となり、経路変更することになりました。そこで、皆さんの経路変更につき賛同署名をいただき、その上で経路変更していきたい。」そうした旅行社の方針が文字で書いてない「ただの白紙」に署名するよう強要されました。ツアー客から「署名しないとどうなるの?」と質問があり、「1人でも署名が欠けると、旅行は進めない」と。皆さんはここでストップするわけにはいかないと、しぶしぶ署名しました。

そうした深刻な話の後、ロープウェイに乗ったりゆっくり市内観光し、ペルー経由の予定をコロンビア経由でメキシコシティに辿り着き、3方面（直行便で成田、サンフランシスコ（米国）経由し羽田、バルセロナ（スペイン）、ドバイ（UAE）経由し関西空港）に分かれての帰国となりました。そうした経過で帰国したので、どれだけの厳重なチェックが待ち受けているかと緊張しましたが、羽田ではサーモグラフィでチェックしているのみで、「感染地のイタリア、スペインからの帰国者は健康チェックを受けるよう申し出て下さい」という看板を持って係員が立っていました。多くの人々がスルー出来る体制で拍子抜けしました。そうした姿勢が、3～4月の感染状況を招いたのではないかと思っています。（写真はウユニ塩湖を4WDで行く光景）



いろいろな困難をくぐり抜けて、ウユニ塩湖を観光し、無事帰国出来ただけに、忘れられない旅となりました。ウユニ塩湖で快適に過ごせ無事帰国出来たことがせめてもの慰めでした。（S）

## 佐倉市の新型コロナ対策について

佐倉市の新型コロナ感染者はじわじわと増え続け、県内6番目ですが、10万人当たりの感染者数は75人を超えています。感染拡大を止めるために必要なのは、感染の発生場所周辺での徹底した検査や、感染リスクの高い施設などの検査拡大です。市民への独自支援策が遅い佐倉市ですが、8月定例議会では市独自のPCR検査委託料750人分、2,475万円が予算計上されました。一歩前進ですがまだまだ足りません。市民の不安をなくすためには一層の予算拡充が必要です。

代表：高塚 一成 『さくら・志津憲法9条をまもりたい会』連絡先 (Tel & Fax) 043-487-1350 (中河), 043-488-0537 (前田) ブログ <http://sakurasizu9jo.cocolog-nifty.com/>

＝世話人＝伊藤繁子(上座)内野光子(宮ノ台)大野博美(ユーカーが丘)高塚一成(上座)中河幸(上座)服部かをる(御宿)前田銀子(宮ノ台)前田泰久(宮ノ台)向山尚子(上座)K・Y(宮ノ台)伊藤寿子(宮ノ台)内田恵子(宮ノ台)S(宮ノ台)